



自分のことばに責任を持つ

学校には、お話スタンプというものがあります。子どもと教師と親御さんをつなぐ連絡ノートに教師が押すスタンプです。そのスタンプが押されたら、子どもは親御さんに学校の出来事を話すという宿題です。子どもが親御さんに話すことで、正確に話す力と学校の出来事を話す機会を作る目的で行っています。

なぜ、こんなことを始めたかと言いますと、教師は子どもの頑張りや良さを知っていてもそれをなかなか親御さんに伝えられず、何かいい方法はないかと考えてのことです。教師が電話や手紙で伝えるよりも、子どもが自分のことばで頑張りや良さを伝えれば、話す力と話す習慣になりますし、学校の出来事を話して心を通わせる親子の会話になることを願っています。そして、もう一つ、自分のことばに責任を持つ人になってほしいと願っています。ですから、頑張りや良さだけではありません。学校では、子どもの話すことばが足らず思い違いが起き、子どもにもう少しことばの力があれば、こんなことにならなかったのと思うことがあります。

先日、1年生のAくんが、「Bくんがぼくだけに絵を見せてくれない」と困った様子で言いに来ました。Bくんは、「ぼくのノートをAくんが取ろうとしたからいやだった」と言い、2人の話がかみ合いませんでした。こういうときは思い違いがあるはずで、授業では、出来事(事実)を順序よく話す、事実と意見や感想を区別して話す学習があります。このような日常でも国語の学習の良い機会になります。2人に初めから順序立てて話をさせると、Bくんがノートに書いた絵を友だちと見ていたこと、そこにAくんがやってきたこと、Aくんも絵を見たくてそのノートを手元に引き寄せたこと、Bくんはノートが取られると思ったこと、Aくんにやめろと言って渡さなかったことがわかりました。AくんとBくんにそれぞれどう言えば良かったかを考えさせて学習を終えました。

次の会話でことばに責任を持つ子どもになると思いますか？

子ども：消しゴムがなくなった。

おとな：なくなったの？誰かの筆箱にまぎれこんでいるかもしれないね。

子ども：そうかもしれない。

おとな：明日、先生に聞いてみたらどう？

「誰かの筆箱に」は、人にせいにする子どもにしてしまいます。「そうかもしれない」は、そういうことにおこうと都合のいい考えをする子どもになります。「先生に聞いて」は、人を頼る子どもになります。ここでは自分がしたことを思い出して話せるようにしてやります。

子ども：消しゴムがなくなった。

おとな：消しゴムがなくなったの？ どうしたんだろうね。

子ども：授業中、使おうと思ったら筆箱に消しゴムが入ってなかったんだ。

おとな：もう一度、探してごらん。消しゴムは授業が終わったらすぐに筆箱に片付けるといいね。(見つかったら)消しゴムがなくなったと、消しゴムをなくしたは違いますよ。